

ニホンヤモリが日本にやって来たのはこの1万年以内でした 大陸東岸から漂流して九州西岸に到達し、そこから人とともに日本全土に拡大？



自然・環境評価研究部 系統分類研究グループ

太田 英利

ニホンヤモリ (Gekko japonicus: 図左) は 19 世紀初めの日本産標本が元となり、文字通り「日本の家守 (やもり)」として記載されました。しかし古文書の情報や現在の生息環境から、日本での在来性には疑問もありました。

そこで一昨年から、韓国や中国の研究者とともに分子生物的手法により、日本国内の各地の集団と、大陸や韓国の集団 (図左中) とを比べてきたところ、ミトコンドリア DNA の塩基配列を指標とした比較 (図右中) や核 DNA のマイクロサテライトに基づく解析 (図右) から、それぞれの地域間で遺伝的分化がほとんどないこと、いっぽう大陸の集団は遺伝的多様性が特に高く、日本の集団がその次で、韓国の集団は遺伝的多様性が限られていました。

さらに、更新世以降の日本や朝鮮半島各地での気候変動の履歴を推定し、現在、ニホンヤモリが野外に分布している地理的範囲から推定されるこの動物の生息可能温度条件の下限の範囲と併せて検討した結果、更新世末期のいわゆる最終氷期と呼ばれる時代 (約 2 万年前) の温度条件下では、日本本土や周辺の島々でのニホンヤモリの生存は、九州の一部のような地熱の高いエリアなど特別な場所でなければ不可能なことがわかりました。

ニホンヤモリはその名とは裏腹に日本古来の動物ではなく、最終氷期が終わって以降に大陸からおそらくは九州西岸に漂着し、人の動きとともに分布を広げ、冬季を人が作り出す暖かい環境を利用してしのいのできるのだと思われます。

